

理工学部の改革① 生命科学科 開設



2008年4月、理工学部に生命科学科を開設しました。

「生命の世紀」といわれる21世紀、先端バイオテクノロジーが成長する一方で、環境問題やエネルギー問題、食糧問題など地球規模のものから、新たな疾病による脅威、食の安全といった身近なものまで、生命科学にかかわる問題はますます広がりを見せています。

その生命科学の基礎から周辺分野の研究まで、幅広いテーマを学べる学科として、8名の専任教員、73名の新入生で生命科学科がスタートしました。

旧来の知識や制度が短期間で陳腐化していく「変化の時代」では、学んだ知識を活用できる人材ではなく、新しい場面で新しい発想を持ち適応できる人材が必要とされます。それをふまえ、本学科では4年次、全員がそれぞれの研究室において未知の生

命現象の解明に挑むなど、独創性を育て、問題を解決するスキルが身につけられるようなカリキュラムを編成し、次代を担う人材の養成をめざしています。

■ 2012年、理工学部で花粉学と古植物学の国際会議開催が決定

2008年9月5日にドイツのボン大学で開催された第13回国際花粉学会議・第9回国際古植物学会議合同大会で、4年後、2012年の開催地を中央大学理工学部とすることが決まりました。生命科学科の西田治文教授が国際古植物会議大会評議員に選任され、会場責任者となります。ドイツでは52カ国800名が参加。花粉アレルギーから植物の進化まで広い話題が提供されます。

理工学部の改革② 土木工学科から 都市環境学科へ



2009年度より、土木工学科が都市環境学科へ学科名を改称しました。

1949年（昭和24年）の理工学部創設時以来、土木工学科は、産業や生活を支える社会基盤施設の建設に役立つ技術者の育成に重点をおいた教育で、9,500名を超える卒業生を送り出し、社会に貢献してきました。

一方で社会は、建設の時代から都市・地域のマネジメントの時代へと移行。大学に求められるものも、安全、利便、景観的にも優れた快適な都市の生活環境を市民とともに創造し、豊かな環境・文化を次世代へつなぐ技術者の育成へと変化してきました。

これまで土木工学科では、講義内容をそれぞれの時代に合ったものに変更してきましたが、2008年度カリキュラム改正を機に、教育内容をよりの確にあらわす「都市環境学科」に名称を改めることとしました。

また、新たな授業科目を加えて体系化し、環境クリエイターコースと都市プランナーコースの2つのコース制を導入。従来の土木工学が扱ってきた専門基礎知識に加え、

地球システム科学や社会科学の知識を融合した、より広範囲な教育内容となり、現代社会に貢献できる人材の育成をめざします。

■ 「ゲリラ豪雨」予測にも貢献

理工学部6号館屋上に設置されているドップラーレーダーは、山田正教授の指導のもと、都市環境学科水理研究室で降雨や風の観測と研究に利用されていますが、日本気象協会と防災科学技術研究所が、本学と防衛大の協力で首都圏に設置している観測ネットワーク「IX-NET」を構成する機器のひとつでもあります。このネットワークにより、いままで困難とされてきた「ゲリラ豪雨」予測の実現が可能になりつつあります。

また、先に発足した「水の安全保障戦略機構」（最終ページ参照）には、山田教授も参加しており、研究成果がひろく国内外の防災へ活かされていくという期待が高まります。